



# 央州寺通信 三月号

菅原祐軌 [ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com](mailto:ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com)

(今月号は来月の北米開教区月報『法輪』四月号の記事と同じです。あしからず。。。)

## 「瑜伽行唯識派と『浄土論』」

「本願力にあひぬれば 空しくむなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」 (『高僧和讃』13 註釈版, p.502)

大乘仏教の「菩薩」には様々な階位が存在します。中でも有名なのは『華嚴経』の十地で、その初地である「歓喜地」をもって、「凡夫」(凡地)と「聖者」を分けるものがあります。聖者の階位に至るまで修行者は退墮する恐れがありますが、聖者の階位に至ればもう退転することがないため、どのようにして「歓喜地」に至るのかというのは大乘の菩薩の間でも大きな関心事でありました。

七高僧の第二祖、インドのヴァスバンドゥを私達は敬意を込めて天親菩薩と呼ばせていただいています。大乘仏教には龍樹菩薩によって大成された中観派、そして天親菩薩によって大成された瑜伽行唯識派の二つの主流がありますが、その天親菩薩の著作の中に『無量寿経優婆提舍願生偈』(略称『浄土論』)があります。天親菩薩は其中で阿弥陀如来への一心帰命を説いてくださったので、浄土真宗において非常に大切な方です。ところが、この天親菩薩が歓喜地以上の聖者ではなく「凡夫」であったという伝承があります。

天親菩薩の生涯を伝記としてまとめた真諦三蔵の『婆薮般豆法師伝』の最後には、天親菩薩が「凡地」(凡夫)であったことについて言及されております。また、瑜伽行唯識派の思想を顕陽する中国唐代の法相宗の窺基(日本では「三蔵法師」として有名な玄奘三蔵の弟子)、その弟子である慧沼も天親菩薩が凡夫であったと伝承します。伝承は伝承ですからそれが事実であるとは限りません。しかし、尊敬すべきである唯識思想の大成者が「凡夫」であったと伝承するのには何か理由があるのではないのでしょうか。

そこで天親菩薩本人の著作を見てみると、『唯識二十論』という論の中で天親本人は唯識について「言葉で考える」段階であることを示唆する言葉があります。唯識について「言葉で考える」というのは、天親菩薩の他の著作である『唯識三十論頌』の第二十七頌に凡夫の段階である「加行位」の状態として示されているものであり、直接的に自己が「凡夫である」という言葉を使われているわけではありませんが、天親菩薩は「凡夫」であった可能性、またご本人が自身は「凡夫」であると自覚されていた可能性は十

分にありえます。

そもそも何故、天親菩薩が「凡夫」であるかどうかの問題であるかという、瑜伽行唯識派の文献によれば「凡夫」が達成できる「願」と「生」には限りがあるからです。しかし、天親菩薩は『浄土論』の中で「願生安楽国」と安楽国（阿弥陀仏の浄土）への往生を願われています。では、その「願生」は凡夫に達成可能なものなのでしょうか？もし達成可能であるならばどのように達成可能なのでしょうか？

瑜伽行唯識派の文献の中に『大乘莊嚴經論』というものがあります。その中で、「大乘經典の中に『生まれる事を願うだけで往生することが出来る』と説くのは怠け心を對治するためですぐに実現可能なものではない」という旨のことが示されています。つまり、凡夫は「願生」するだけでは往生することは出来ないというのです。

さて、『大乘莊嚴經論』の他の箇所では凡夫が達成可能な「生」は「業の力によって思いのままの所に生まれることが出来る」という「業力自在の生」であると示されており、これに従い『浄土論』を見ていくと、その中に「五念門」という修行方法が説かれ、身業・口業・意業の三業による修行が説かれています。すると、阿弥陀仏の浄土へと往生を願うものは三業の修行が必須であり、その業の力によって極楽へと往生することを『浄土論』は示しているようにも読めます。

しかし、本来、凡夫の煩惱に汚れた業の力は自己を迷いの世界に縛り付けるものであり、思いのままの所に生まれる原因となることなどできるはずがありません。では何故、凡夫が業の力によって思いのままの場所に生まれることができるのかという、それは仏の「救護」の働きによるからであります。『大乘莊嚴經論』には、仏は衆生の煩惱に汚された行い(業)によって、生老死という苦を生じる惑・業・苦の輪廻から救護することが示されています。つまり、「業力自在の生」の根底には仏による「救護」の働きがあるのであります。

唯識思想を研究されておられる筑波大学教授の佐久間秀範先生によりますと、瑜伽行唯識派の根本論書とも言える『瑜伽師地論』「撰決択分」の通称「涅槃章」と呼ばれる箇所で「転依（よりどころの転換・迷いからさとりにへの転換）」に対する新旧解釈のせめぎ合いがあるといいます。つまり、修行によって煩惱を滅し尽くすという「自力」的な旧解釈に対して「仏の世界から清らかな種子が修行者に植えられるという、仏の側からの働きかけで成仏することを意味する」という「他力」的な新解釈が後に主流となったと言います。

この「転依」の新解釈、そして、さきほどの仏による「救護」という解釈は天親菩薩が在世の頃には既に存在していた考え方でありました。そこで、天親菩薩が『浄土論』で示さんとしたのはどのような凡夫でも、阿弥陀仏の本願力という仏からの働きかけ、救護の働きによって「歓喜地」へと至り、そして成仏するという「他力」の思想であったのではないのでしょうか。ですから、たとえ煩惱にさいなまれる凡夫であろうとも、「本願力」に遇えば、空しくすぎていくことはなく、仏となるさとり因が満たされるので

あります。大切なことは自力に依る修行によって煩惱を滅していくことではなく、阿彌陀仏の本願力に遇うこと、法を聞くことであります。

さて、今回の記事は私が二月に提出・合格した修士論文の内容を記事用になるべく簡潔にまとめようと試行錯誤したものでありますから、読み返してみると結局は難しかったかもしれませんし、まだまだ言い足りないこともあります。何か感じ取る所があったならば幸いです。

合掌

文責・菅原祐軌 中央寺駐在開教使

<三月の予定>

- ・毎週日曜日十時よりお勤めがございます。
- ・日本語法話は二十四日に、「浄土真宗では何故般若心経を唱えないの？」をテーマにお話させていただきます。

<四月の予定>

- ・毎週日曜日十時よりお勤めがございます。
- ・四月二十八日は春のバザーのためお勤めがございません。美味しい食べ物が沢山売りに出されますから、皆様お誘いあわせの上お越しく下さい。

